



memoirs.07
cigarettechocolate



延藤 詩喜

誰だつて憂鬱になる日があると思うんだ。閉じこもったり沈んだり、誰の日にも晒されない空間に身を置きたいと考える。それは仕方のないことだし、多分平等に訪れる。

最初それはとても小さな闇かもしれない。弱く、すぐに過ぎ去つてしまふ霧雨だ。けれど、通り過ぎるのを待つてる内に、闇はどんどん大きくなる。自分では気づかない内に、闇はどんどん膨張し、次第に精神を蝕んでしまふ。誰だつてそうはなりたくない。勿論、僕も。

だから僕らは探し求める。安心出来る居場所を。

そこでは色々な物事がうまくいく。誰だつてすぐ心の内を見せ合つて、普段は語りもしない内面を晒け出し、まるで心の在処を共有するように得意になつたり出来るはずだ。例えそれが現実から目を逸らす行為であつたとしても、救われるものだ。そして僕らは最後に気づく。

——ああ、こういう場所を探してたんだつて——

何故そんなことが言えるかつて？ それは僕がそうだつたから。

そんな僕の物語は、17歳の夏に始まり、翌年の春に終わる。

2

雨だ。しんしんと降り落ちる無数の粒——。

雨の雨が嫌いだ。落ちてくる水の粒も、纏わり付く空気も、何もかも。怪我した肩も疼いてくるし、寮は部活の奴らで溢れている。以前はそんなことに何とも感じなかった。それどころか部活が休みになるのだから嬉しくもあつたくらいだ。寮の奴らと連れだつて街に出て映画を見たり、積もり積もつた宿題と部屋の埃を処理することだつて出来た。けれど今、雨の日は出来るだけ外で過ごすことにしている。肩を痛め、野球部を離れた半年前から——。

少し昔話をしようと思う。それは思い出と呼ぶには遠く、過去と呼ぶには最近の話だ。

僕は野球のスポーツ推薦で高校へ入学した。中学時代、県の選抜に選ばれていたことが大きかつたと思う。肩が強く、リードだつて悪くないキャッチャーとして迎えて入れられ、高校でもすぐにレギュラーとして起用された。それは漠然と思ひ描いた理想の高校生活だつた。周囲から期待され、クラスメイトからもてはやされる内、僕は少しずつ得意になつてしまつた。そして、少しばかり有頂天になつていたことが災いしたのだろう。一年最後の試合、その試合を最後に僕の野球人生は終わりを告げることとなつた。

9回裏、2アウト1、2塁。あと一人抑えれば勝ちだつた。けれどバッターが打つた打球は左中間に長く伸び、2塁ランナーが3塁を回つてホームへ帰ろうとしていた。ホームで刺そうと待ち構えた僕は、イレギュラーバンドする玉を見失つてランナーと接触、その結果怪我を負い、野球では使い物のならない肩となつた。

それは考えたくない結果だつた。推薦で入学した僕は授業料を免除されていたからだ。怪我によつて戦力外通告を受けた僕は免除が取り消され、おまけに勉強はろくすつぽ出来なかつた。それに県外から入学した僕は、その後も野球部の寮での生活を余儀なくされた。

怪我をしてから周りの反応は驚くほど変化した。あれだけうまくやっていた寮の奴らともぎこちなくなり、今では顔を合わすことさえ億劫になつた。僕を取り巻く様々な物事が音を立て、少しずつ壊れてしまふのではないかと、とても不安になつた。

だから練習のない雨の日は僕にとつて耐えがたく、寮が静まりかえる時間まで寮から離れた場所で生活を送るようになった。ぎりぎりまで構内を彷徨き、それからゲーム・センターや遅くまでやっている図書館や喫茶店で時間を潰した。勉強にも身が入らず、軌道の逸れた僕の人生は墮落していった。かつての輝きは臆気な夢となり、すぎるものを失くした僕は膨張する時間の中に取り込まれていった。

茫漠な時間はくだらない自問自答を引き起こし、その度に僕は自身を喪失しつつあつた。自分の弱さや枯渇を誰かしらに肯定して欲しかつた。

だからだろう。文芸棟の空き部屋で初めて先輩と出会つた時、僕は内面の全てをべらべらと話してしまつた。けれどそれは仕方ないことだつたし、必要なことでも

あつた。だって僕はその日、彼女の存在にすっかり救われたのだから。

4

ホーム・ルームが終わり、手早く荷物を鞆に詰め込んだ僕は、先輩から頼まれていた本を受け取るために図書室へと向かった。彼女と出会って以来、すっかり慣れ親しんだ高校の図書室。受付には同じクラスの女子が静かに座っていた。彼女は僕を見るなり小さく微笑んだ。

「読書家なのね、佐々木君。こんなに早く来るなんて——放課後が待ち遠しかった？」

彼女はそう言つて2冊の本を後ろの棚から取り出した。ナポコフの『ロリータ』、トルストイの『闇の力』。2冊とも先輩から頼まれていたものだ。僕にはさうばり分らない。

「それでもないよ。君の方がずっと早くから図書室に居る」

「だって私、ホーム・ルームに参加していないもの。驚いた？」

僕は肩をすくめて見せ、2冊の本を受け取った。

「佐々木君、良かったらこの本も読んでみてくれない？」そう言つて彼女はさらに一冊の本を僕の手に、持つて来た。

「ドストエフスキー『貧しき人々』ん……僕に？」

「図書カードに履歴が残ってるのよ。きつと気に入ると思うわ」

「ああ」と僕は納得した。その本はいかにも先輩の好みそうなものだった。

「勝手なことして怒つた？でも佐々木君、部活を辞めてから頻繁に図書室に来るし、それに——私と趣味が似てたからつい……」

「いいさ、ありがとう。ゆっくり読んでみるよ」

彼女は笑つて手を振った。またね、と。

図書室を後にした僕は目的の地へと真つ直ぐ向かう。隅り場の窓から見えた空は厚ぼつたい雲に覆われ、大粒の雨が降り落ちていた。

「この分じゃ、部活は全部休みだな」そう呟いて空を睨んだ。

僕の目的の地は文芸棟のちようど真ん中、表札の出ていない空き教室だ。半年前まで存在すら知らなかった干上がった部屋。先輩はそこで本の到着を待っている。小さな備え付けのキッチンと調理台、幾つもの蛇口と丸椅子。かつての調理部の面影が残るその部屋で彼女は静かに待っている。

ドアの前に立ち、小さく2回ノックする。中から声が聞こえ、僕は部屋の中に通される。先輩は窓際の丸椅子にドアに背を向けるように座っていた。

「予約してた本を取つて来ましたよ」

「うん、ありがとう。ここに持つて来て」彼女は目を合わさずにそう言つて、片隅に置かれたフラスコだかピーカーだかが縦に並んだ器具を眺めた。

「じゃあここに置いときますね。ところで何の実験です？」

「少し待つてね、後一滴つてところだから——あつ！やつた完成よ」

彼女は言つて、奇妙なフラスコに入つた黒い液体を氷の入つたグラスに注いだ。

「それもコーヒーですか？」

「そうよ。水出しコーヒーつて言うの。昨日の晩、きみが帰つてからセットしてようやく抽出が終わつたの。さあ、飲みましょう」

彼女のコーヒー好きは今に始まつたことじゃない。僕が初めて部屋に訪れた時、既にこの部屋は彼女の為の喫茶店だった。初めて彼女に出会つた時もこうして共にコーヒーを飲んだのだ。

5

彼女と知り合つたのは今年の5月。

だから、知り合つてちようどひと月になる。

戦力外通告を飲み込むことは比較的簡単だった。肩の強さが取り柄のキャッチャーがその肩を失つたのだから、そこに残つたのは何の取り柄もないただの野球部員でしかない。僕の方でも二度と光の当たらない競技を続けるほどの未練はなかったし、その時は何より、自らの存在意義すら信じられなかった。顧問と部員に別れを告げて残つたものは、勉強もろくに出来ない取り残された学生の肩書きと居心地の悪い野球部の寮だけだった。

けれど——それでも時間は流れる。何かをしても、しなくても。目標と指針を失した僕は、ダリみたく時計の秒針が渦巻くアーバン・ライフの中、時間を拡大させて咀嚼することも出来ず、様々なものに置いて行かれる自分のルーズさに嫌気がさした。

いや——自分を取り巻く環境の全てに嫌気がさしていたのかもしれない。皆が僕

を蔑^あすんでいるように思えた。落ちこぼれていく僕の姿を、彼らが同情しているように思えたのだ。だから僕は誰とも距離を近づけず、自分の殻に籠^{かご}もるようになった。皆の視線を気にするまま、天候に左右される無茶苦茶なライフスタイルが出来上がった。そのせいで遅刻は増え、授業はますますついていけなくなる。それは断ち切れない悪循環の始まりだった。殻に籠^{かご}もつた僕に声をかけるものはおらず、僕もそれを望まなかった。僕はそうやって取り返しのつかない距離までゆつくりと、しかし確実に進んでいた。

もしもあの頃、先輩と出会うことが出来なかつたなら、今頃はどうしていたのだろう？ 想像するのは怖い。けれど僕は運良く彼女と出会い、少しだけ前を向いている。だから僕は未だに彼女に頭が上がらない。

彼女は、その瞬間まで僕の知らない人だった。

当たり前の話だ。彼女は先輩で、それに何の部にも所属していない、一際目立たない学生だったのだから。

ある雨の日の放課後。僕はいつものように空き教室を探していた。ホーム・ルームと同時に教室を出て、廊下をゆつくりと歩く。行き先は特に決めていなかった。2階の隅り場から文芸棟へと続く廊下を歩き、人波をくぐり抜け、静寂を求めゆく。そこに楽しみは見つけられない。ただ、心が穏やかになる場所を求めただけだ。文芸棟の2階から1階へ下りる途中、野球部の奴と目が合った。僕は目線を外し、たまたま目についた表札の出ていない部屋のドアを開き、逃げるように中に入った。

その部屋には誰も居なかった。そこに在るのは備え付けのキッチンと幾つかの円椅子。そして奇妙な調理器具。塵部になった調理系の部室だと、以前どこかで耳にした覚えがあった。僕は袍をほつぽり投げて照明を消し、雨の音を聞きながら目を閉じた。

「ねえ、カップはひとつしかないの。きみは茶碗でもいいかな？」

いつから彼女がそこに居たのかは分からない。けれど気づいた時、彼女は僕の前で湯気立ったティー・ポットを持っていた。

彼女はステンレス製のカップとプラスチックの茶碗の両方にコーヒーを注ぎ、目を細め差し出した。僕は赤い茶碗の中、無秩序に波打つコーヒーのカオスをほんやりと眺め、スプーン半分の砂糖を入れてゆつくりとかき混ぜてから窓際を見た。

雨は止んでいた。外は少し日差しが強く、リファインされた空気に突き刺さって微かに震えていた。彼女はカップに両手を合わせ、同じく雨上がりの世界を見つめ

て言った。

「良かったね。雨が上がって」

そして僕はその日から、奇妙なこの部屋の住人となった。

6

「さて、今日は何を借りてきたのかな？」

先輩は図書室から戻ったばかりの僕にそう訊ねた。

「ワールズ・エンド」

「わお。ポール・セロー？」

彼女は大げさに驚いて何かを測るような目つきになった。

「何？」

「それもあの子のセレクトなの？ その……図書員の女の子の」

「そうなるね」

「随分仲良くしてるのね？ 一人で図書室に向かうだなんて」

そう言った彼女の声には少しの棘が含まれていた。ただ、彼女が何に怒っているかは分からなかった。

「どうして？」

「だってきみは、これまで殆ど本なんて読んでこなかったじゃない。図書室は昼寝の場所だと勘違いしてたでしょう？」

「先輩がいつも本を読んでいるからね。さすがに影響は受けるよ。それに……何となく分かってきたからさ」僕はそう言っただけ振り振った。

「一体何のこと？」

「先輩が本を読む理由」

「言ってみてよ」

彼女は飲み終えたティーカップを水で流しながらそう言った。

「上手く伝えることは難しいけれど、物語に触れるのは心地良いんだ」僕は借りてきた本のページをペラペラ繰りながら言った。「本を読む度、何か大事なものが見つかりそうな気がするんだね。物語を通してそこにある何かを共有して、分かち合っただけで理解していく。その殆どは何処かの誰かが、何かを探す物語だ。そして彼物語の中でそれを見つかるかもしれないし、見つけられないかもしれない。でもね、そういう結末はどっちだって良いんだ。結局は探し求める行為こそが心地良いと感じ

るからね。物語を読む度に、何かを求め続けなければ生きていく意味なんてないんだって気持ちになる」

「それが本を読む理由？」

「分からない。でも、少しは救われる。少なくともある種の慰めとして受け取る事が出来るから」

「人は何かを探し求めていくべきだって？」

「先輩も、そして僕も。人は大切な何かを探さなきゃならない」

僕がそう言うのと彼女はまじめくさって肯いた。けれど瞳の奥には翳りがあった、僕は少しだけ不安になった。だから僕は彼女の言葉の続きを黙って待った。

「きみはその目でどんな世界を見ているのかしらね。私には想像もつかないわ」

「そう？」

「でも……世界を厭世的に見ている人の目に比べたら、あなたの目はもつと強い光を放っているわ。そうね、あなたには想像力がある。私はね、そういう風に考えたことなかったかな」彼女はそう言うで一呼吸置いた。僕はその間、彼女の綺麗な指を眺めていた。

「何も言わないでね。私は人生を厭世的に見ている人間じゃないの。私はまっすぐ前を向いていたいの。脇目も振らず、ずんずん前に向かって歩いていきたい。その先に幸福が待っていると信じているから。今だって幸福を見つけられたし、その先にもたたくさんの幸福が待っているんだって信じてるの。物語に触れるのはそういうこと。例え現実が苦しく、ひどく狭い世界だったとしても、物語に触れる度、私の世界が少しずつ広がっていくの。それが私の本を読む理由。きみと私がここに居る理由」

「ねえ、何か辛いことでもあった？」

僕はそう訊ねた。彼女がこんな風に話したのは初めてのことだった。

「何もないわ。変わらないもの」

「そう……」

「ねえ、今でも野球が好き？」唐突、彼女はそう言った。僕はうまく聞き取ることが出来なかった。

「野球よ、野球」

「どうしてそんなこと訊くの？」

「どうしてかしらね。分からないわ、何となくよ。でもね、私はきみが野球をしているの好きだったのよ。ここからはグラウンドが良く見えるでしょう？」

僕は黙って肯いた。

「きみみたいに一生懸命になれたらなって思ってたの」

「一度好きになったのものはそう簡単に忘れないさ。今だって好きだよ」

「ねえ、私のことも覚えていてね。来年私が卒業してきみと離れてしまっても、私のことを覚えていてね」

「忘れやしないよ」

7

梅雨が明け、夏が始まろうとしていた。それは僕と先輩の日常に変化を与える季節となった。雨の日にしか訪れない僕は、梅雨が明けてさっぱり雨が降らなくなると、殆ど彼女と顔を合わさなくなった。

僕はきくと、雨の日以外はあの部屋に甘えなくなかったんだと思う。けれど、どうしてか彼女の方も晴れの日ばかり家に帰っているようだった。その頃の僕は放課後の教室から、窓際に広がるグラウンドをよく眺めていたが、その風景の中、足早に去って行く彼女の姿を何度も目にしていた。そして、その後ろ姿はいつも一人きりだった。

どうして彼女が雨の日に学校に留まるのか、僕は気になって仕方なかった。あの部屋以外の彼女のことを僕は未だに何も知らない。昼休みに覗きに行つた3年の教室、彼女はいつも勉強していた。一人きりでノートを広げ、ポータブル・プレイヤーで音楽を聴いていた。僕が見た限り友人と話したり、仲良くやっているようには見えなかった。

彼女は何を考えているのだろうか。僕は彼女が言った言葉について考えるようになった。

——彼女が本を読む理由。僕らがここに居る理由——

曖昧過ぎる彼女の言葉はいつも結論を遠ざける。僕はその度に頭を悩ませ、煙草を飲むようになった。

晴れの日がらんとした寮の自室で本を読むことを始めた。彼女がかつて借りた本と、湯を注ぐだけのインスタント・コーヒー。ビル・エヴァンスのジャズピアノとゲーム・センターで拾った湿気た煙草。渦巻く思考と煙の中、本に秘めた彼女の心に触れてみたかった。

学校生活は相変わらずだったけれど、図書委員の女の子とは頻りに話すようになった。昼休みに昼食を共にし、本の感想を交換するようになった。でも、結局それも先輩の気持ちも少しでも理解しなかったからだ。物語の本質を理解出来なかった僕は、図書委員の女の子に手助けを求めるようになった。

「ねえ、一体何を眺めているの？」

放課後の教室で図書委員の女の子がそう訊ねた。

「何も見ちゃいないよ」と僕は本の中に視線を向けた。

「嘘よ。あの人を眺めてるんでしょ？」

僕は驚いて彼女を見た。帰宅連中の中、足早に去って行く先輩の姿があったからだ。

「あの人、変わってるわ」彼女はそう呟いた。

「彼女を知ってるの？」

「あの人ね、よく本を借りに来てたの。ここのところ見なくなっただけ」

「そう……」

「ちょうど佐々木君と入れ違いよ。あなたが来るようになってからよ、あの人が出来なくなったのはね」

僕は黙って肯いた。

「あの人とあなたの趣味は似てるわよ。今度話してみたらどう？」

「機会があればね」僕は曖昧にそう言った。そして、急に居心地が悪くなった。

「彼女がどう変わってるのさ」

しばらくして僕はそう訊ねた。もう二週間以上先輩とは会ってはいなかった。

「あの人、勝手に部室を使ってるのよ。ほら、去年廃部になった調理部の部室よ。」

「どうしてそんなこと」

「理由は詳しく知らないわ。何度か目にしただけだから。でも……そういうのっていけないことだと思わない？ 勝手に部室を使ってるさ。普通じゃないのよ。きっと精神がおかしいのね。インキキな本ばかり読んでさ」

「知ったような口をきくなよ」僕はそう言いたかった。けれど僕は、ただひたすらに先輩が去って行く姿を眺めただけだった。

久しぶりの雨だった。それは夏休みが始まる一週間前のことで、予報では夕方過ぎには止むはずだった。

夏季講習で午前だけの授業を終えたと急いで文芸棟を目指した。随分と先輩と話していなかった。降り始めた雨は弱かったけれど、僕には彼女が来るのが分かっていて。彼女にとってもあの部屋で過ごす時間が大事だと信じていたからだ。けれど部屋はがらんとして、そこに寂しさしか残っていなかった。鍵は開いていたけれど、彼女の姿は見つけられなかった。

僕は部屋の中をゆつくりと眺め、彼女が残したメッセージのようなものを探してみたが、そんなものはあるはずもなく、変化があるとすれば冷蔵庫のコーヒーが空になっていたことくらいだった。

「きみがいつ来てもいいように、ここにアイス・コーヒーを入れておくわね」

かつて彼女はそう言った。けれど今、その冷蔵庫には二人で食べたチョコレート残りが入っているだけだった。僕は彼女がそうしたように、窓際の席に座って食べ残りのチョコレートと何冊かの本をテーブルに置いて頭を振った。

「もうここには来ないかもしれないな」

ふと呟いたその言葉は、どうしてかひどく説得力があった。まるで最後に残った

パズル・ピースのようにびったりと空間に収まった。

僕は急いでカーテンを閉めて部屋中の電気を消し、小さなテーブル・ライトの明かりを点けて煙草を吸った。重ねた本から『夜はやさし』を取り上げてポータブル・プレイヤーで『ワルツ・フォー・デビー』を流した。聴こえてくるピアノの旋律はゆつくりと雨音を消し去り、心を物語の奥底へと追いやった。

僕は雨が止んでしまうのを見たくはなかった。ただそれだけだった。

どれくらい時間が流れたのだろう。スコット・フィッツジェラルドの緊張感のない、虚無的な甘さと気怠さの後には何も残らなかった。灰皿代わりに持って来た缶コーヒーには、これ以上入れてくれると言わんばかりに煙草が突き刺さっていた。

潮時だった。僕は最後の煙草に火を点けて静かに目を閉じた。その時——扉は唐突に開いた。そして彼女が現れた。

「来てたんだ」

彼女はそう言つて両手一杯に持った紙袋の山をテーブルへ置いた。

「どうして灯りを点けないのよ。暗くて何も見えないわ。ほら、そのブラインドを上げてちょうだい」

僕は彼女に言われるままにブラインドを上げ、日の見えなくなつた窓から空気を取り込んだ。彼女は紙袋の中から挽き終えたばかりのコーヒー豆を取り出してドリツポットの火をかけた。僕は淡々と彼女がコーヒーを淹れるのを眺めながら、煙草の煙を吐いていた。言葉はどちらからも出てこなかつた。

しばらくして彼女は抽出の終わったコーヒーを、真新しい二つのティーカップに注いだ。

「ティファニーのカップよ。素敵でしょう？ 中古品で安かつたから買つて来たのよ。幾らくらいしたと思う？」

「分らないな」

「1500円よ。安いでしょう？」

僕はソーサーを手を持って肯いた。

「ねえ、どうして話をしないの？ 久し振りにきみと会えたのに……。それに、どうして煙草なんて吸つてるの？ きみは未成年だし、匂いだつてきついだよ」

「多分……。どうしてか分からないから吸うんだと思うよ。空白の時間が怖いのにさ」僕は煙草を強引に缶の中に入れ、彼女が淹れたコーヒーを一口だけ飲んだ。

「随分雨が降らなかつたもの。ねえ、寂しかった？ それとも構つて欲しかった？」僕は急に耳が赤くなるのを感じ、ふいにその瞬間——彼女のことを好きだつたという気持ちに気づいた。

「雨の日はここにいるわ。これから先もずっとね。心配しないでいいのよ」

「うん」

「チョコと本とブラック・コーヒー。きみと私と雨模様。二人で居ると落ち着くね」彼女は笑つてそう言った。

9

その年の夏休みは悪くなかつた。僕と彼女は一緒にいろんな場所に出かけたし、コーヒーの淹れ方も学ぶことになつた。合羽橋で器具を買い、豆を買い、彼女と揃いのステンレスのカップも買った。

幾つかの喫茶店を二人で巡り、何本かの映画も見に行つた。それはまるで恋人達があつたような濃密で素敵で時間だつた。

彼女の方は大学入試が迫つて来たが、緊迫した雰囲気はどこにもなく、ただひたすらに流れゆく最後の夏を共に過ごした。

10

新学期が始まると雨はますます降らなくなつた。僕は雨の日しか訪れないと決めたことを後悔した。生活は相変わらずで、図書委員の女の子と昼食を共にし、寮では遅くまで本を読んで過ごした。小雨程度の雨はあつたが、それは足早に過ぎ去る通り雨で、先輩と顔を合わすことは出来なかつた。

新学期が始まつてしばらく、先輩が晴れの日も部屋に居るのを知ることとなつた。下校中、時折振り返る文芸棟の部屋の中に何度か姿を見かけたからだ。彼女に会いたい気持ちはあつたが、受験前の追い込み時期に邪魔をしたくはなかつた。彼女はあの部屋の中、一人籠もつて勉強していると僕は考えていた。

「クールになれよ」

時々僕はそう呟いた。甘つたれるなど。もう何かを与えられるのはごめんだった。僕は彼女に救われたし、優しくしてくれた。けれど僕は何ひとつ彼女にしてやれない。彼女の進路も生活も、内に秘めた何もかも、僕はひとつも理解しやしない。次に彼女と出会うなら、雨の日かあるいは彼女に必要とされた時だと考えていた。彼女のことを好きだつたが、それ以上に彼女に必要とされたかつた。

「佐々木君には知らせておこうかな……」

放課後の教室で図書委員の女の子がそう言った。

「何？」

僕は買つてきた総菜パンをコーヒーで流し込んでから言った。

「今度出来る部活に入ろうかなつて」

「何のクラブ？」

「調理部よ。ほらっ、前に潰れちゃつたでしよう？ 今期から入つた先生が顧問を引き受けてくれるらしいのね。私つて料理がからつきだからさ。うまくなつたら佐々木君のもつくつてあげるよ」

「いつからさう！」

僕は突然大声を出した。それは自分でも驚くほど大きな声だった。驚いた彼女は手に持った紙バックのジューズを地面に落とした。

「いつからさう……急にどうしたの？」

「そのクラブさ。それはもう決まってることなのか？」

「ああ、うん。新学期になってすぐ掲示板に貼ってあったよ。来週説明会だつてさ」

僕はそれを聞いて席を立った。

「ねえ、どうしたのよ」

彼女はそう言ったが、僕は彼女の言葉を遮って教室を抜けた。

——考えれば分かることだった。調理部は希望者がいなかったことで廃部になったわけじゃない。顧問が学校を辞めてしまったからだ。そのせいで顧問の居なくなつた調理部は廃部となつたのだ。

いち早く先輩に伝える必要があつた。あの部屋は彼女にとって必要な場所だと知つていたので。なら尚のこと、僕の口から伝えてやりたかつた。

部屋はがらんとしていた。幾つもあった抽出器具もコーヒー豆の匂いもしない。

二人で使つたティファニーのカップも、一緒に買ったコーヒー豆や映画のポスターも何も残つちやいなかった。部屋は綺麗に整理され、窓際には大きな段ボールが積まれていた。

彼女はすでに知つていたんだと思ひ知らされた。彼女は一人暗れの日も部屋に籠もつて整理していたのだ。おそらく顧問が誰かに見つかつたのだろう。あるいは最初から見逃されていたのかもしれない。新しい顧問が決まるまでの僅かな時間、彼女が黙つて使うことを。

僕は並んだ蛇口のひとつに口をつけ、苦しくなるまで水を飲み込んだ。頭の中で黙々と整理する彼女の姿が浮かんでくる。彼女は何を考へていたのだろうか？ 相談さえて貰えなかつた僕は、彼女にとってどんな存在だつたのだろうか。

鉄臭い水道水は喉を通り、食道を通つて胃に流れ込み、肝臓を通して循環していく。——くそつたれ。

片的にしか思い出せなかつた。この夢が今日一日にまで浸食しないことを願ひコーヒー豆を挽いた。

二人で過ごした部屋にものがなくなつてからというものの、僕は天候に関わらず部屋に訪れるようにした。山積みになつたままの段ボールは、いつか彼女が現れることを示していたし、部屋の最後は二人で見届けたかつたからだ。けれどこの三日間、彼女は姿を見せなかつた。僕は一人で部屋に残された段ボールをほんやりと眺めてから、教室から持ってきた雑巾で丁寧にフローリングを磨いたりした。何かをしていなければ、部屋に染みついた彼女の思い出に浸食される気がした。

コーヒー豆を挽き終えると寮の食堂へと向かつた。普段なら利用者のない日曜の食堂であつたが、この日ばかりは多くの学生が居た。窓には幾つもの水滴がしたたり、遠くに見えるグラウンドは取り返しつかないほど湿り気を帯びていた。

僕は一人きりで隅のテーブルに腰掛け、ゆつくりと食事をとつた。考へてみれば今の僕には些細なことだつた。雨の日に集うきこちない寮生との関係より、大事なことは山ほどあつた。

自室に戻りコーヒーを淹れる頃には雨音はいつそう強くなつた。自分で淹れたコーヒーは味気なく、たまたまなく彼女のコーヒーが飲みたくなつた。淹れたてのコーヒーをそのまま残し、寮の部屋を飛び出した。

彼女が部屋に居るとは思えない。それでも僕は部屋に向かつた。空き部屋の器具は既に段ボールの中だつたし、簡易式の冷蔵庫に作り置きのアイス・コーヒーはない。けれど、その部屋に行くことで胸に燦る厭な感情を払いのけることが出来る気がした。今更になつて僕は、少しずつ部屋を愛し始めていたことに気づいた。

寮から文芸棟までの距離は近くなかつたが、僕は傘も差さずに駆け抜けた。明後日に部屋はなくなつてしまう。唯一僕を救つてくれた雨の日の教室。それは決して失くしてはいけな場所になつていた。

部屋の前に立ち、ゆつくりと深呼吸する。高鳴つた鼓動は、まるで己の頭に悪い虫が住み着いたように、厭な響きを全身に伝えていく。扉を開いたその先に、誰も待つていなくとも、大きく息を吐き出してノックもせず扉を開いた。

開いた扉の視界の先——彼女はそこに居た。

彼女はまるで世界の終わりを見つめるように、シガレット・チョコレートを啜え、

窓の先に広がる景色を眺めていた。

「雨だね。それも大雨だ……」

彼女は静かにそう言った。あるいはそれは僕にに向けた言葉ではなかったかもしれない。彼女の視線は変わらずに窓の向こうにあった。

「煙草はやつぱり駄目ね。あなたみたいに上手く吸えないわ。でも——これは優しいココアの味がする」

彼女は唾えたシガレット・チョコレットを小さくかじった。彼女の口に消えてゆくチョコレットを見て、僕はいつかのたわいないやりとりを思い返した。彼女の先に広がる景色を俯瞰で眺め、決意して言った。

「……寂しかった？ それとも構って欲しかった？」

「どうして良いか分からなくなつたわ……」振り向いた彼女の頬にはきこちない涙が伝っていた。

「何故何も言わなかつたの？」

僕は積まれた段ボールを眺めながら、彼女にそう尋ねた。

「どこから話せば良いか分からなかつたのよ」と言つて彼女は頭を振つた。「——違うね。きみがいつも部屋に来る度、穏やかな顔するものだから、うまく切り出せなかつたのよ」

「ごめん……」

「いいの。きみと一緒に部屋に居ると、悲しい気持ちを忘れられるから。ねえ、何故私が雨の日にここに居るのか知りたい？」

「ああ」

「ここは私の逃げ場所なのよ。雨の日は家に居たくないの……」

彼女は少しづつ言葉を紡いだ。小さな家で父と二人で暮らしていること、高校に入つてから父との関係がこじれ、もう二年以上も会話らしい会話をしていないこと——。既に彼女は泣いていなかったけれど、小さな肩は小刻みに震えていた。

「これは多分、思春期のせいかも知ね。私はもうあんな父を見たくないのよ。昼間から酔つ払つて機嫌が悪いと様々なモノを壊し、ギャンブルにしか感心のない父。あの人と二人きりで家に居るのが不安なの。彼の纏う深い闇が、まるで私にまで浸食してくるように思えてくるの」

彼女の父がいつからそうなつたのかは分からない。あるいは始めから、彼女がずっと小さい頃からそのような父だったのかもしれない。けれど彼女が成長し、自身身のモノサシで世の中の大人を区別出来るようになってから、父の中の醜さが浮き上がつて見えてきたのかもしれない。

「彼は建築現場で働いているの、いわゆる土方仕事ね。アルコールの入つていない彼は結構評判みたいで、雨さえ降らなければ仕事に出かけて行くわ。けどね、雨の日の父は居間に入り浸つてアルコール漬けになる。私はそんなふうには溺れていく父を見たくないのよ」

「顔を合やすことは辛い？」

「辛いわ。アルコールが入ると手に負えないもの。だからこの部屋を見つけた時、心底ほつとしたの。ああ、もうこれで大丈夫だつて。この部屋を使うことは先生からも許可を取つてあつたのよ」

「向き合おうとはしなかつたの？」僕はそうは訊ねてみたが、言つた側から後悔が押し寄せてきた。僕だつて何も向き合えなかつた。自分が落ち着ける場所を探し求めてここに辿り着いたのだ。

そう——彼女と僕は一緒だつたのだと気がついた。同じ不安を胸に潜め、辛い気持ちを押し隠し、二人静かに寄り添つていたのだ。

彼女は全てを俯瞰したように、僕の質問には答えなかつた。

「私はずつとこの部屋で父の存在をスポイルしようとしていたのね。でも——それも今日までね」

「ああ。この部屋はもう使えない。明日からは調理部が使用することになる」

「そうね。あと半年の辛抱よ。なんとかしてみせるわ」

「お父さんとは上手く話せそう？」

「駄目よ……。距離が離れすぎたわ。そこまで高望みはしないの。それにね——代わりにきみと出会えたわ。だからそれで満足なのよ」

僕はふいに泣きそうになつて、黙つてフリーリングの床を眺めた。

「私達はどうなつていくんだらう。どう変わつてゆくんだらう」

彼女は語りかけるように呟いた。それはこの部屋がなくなつてからの僕達か、あるいは彼女が卒業した後のことを言っているのか、僕にはさっぱり分からなかつた。言葉はいつも曖昧で、僕の心を惑わしていく。だから僕は自分が思うままを彼女に伝えた。

「根本は変わらないさ。僕達がこうして一緒に居る。先輩が豆を挽く横で僕は本でも読んでるよ。……変わらないさ」

変わらない——それはただの願望だらうか？ 街も人も生活も、やがて全ては変わつていく。その中で僕達の関係が変わつてゆくのは百も承知だ。けれども僕はそう言つた。我が儘でも何でも良い、僕は今の二人の関係が好きだつたし、この先もずつと続くことを心から願つていた。

「変化はしてるのよ。それは私の体が証明しているし、往々にして人は変わるものよ。状況は常に変化し、日まぐるしく私達を動かしていくわ。環境、季節、個人の感情、その他諸々——。変化は必然なのよ。私もきみも、変わらなければならぬのよ」

僕は軽い目眩の中、沈黙していた。

「時の門番は無慈悲じゃないさ。変わりたくないなら、少しくらい待ってくれるよ」僕は半ば自棄になってそう言った。

「打ち明けるのが遅かったね。きみは私にとって何だ？ たんだろう？ 出会った時からきみのことを分かっていれば、今頃はもっと良い方向に進めていたのかもしれない。私ね、卒業したら海外に行くの。単身ヨーロッパを周って、いろんなカフェで修行するのよ。きみは……どう思うかな？」

僕は言葉に詰まった。それは本当に突然の告白だった。

「どう思うって……、唐突すぎるよ。本気なの？」

「本気よ。自分の手でつくってみたいのよ。皆が笑顔でいられるような、それぞれの孤独を埋められるような幸せな場所を提供したいの。私は……私自身を幸せには出来なかつたけど、他の誰かなら幸せに出来る気がするの」

「勉強してたのはそのせい？」

「覗いていたの？」彼女は目を丸めてそう言った。

「心配だっただけさ。先輩は強すぎるから。いつでも自分の意思に素直なんだ。僕にはそれが少し危うく見えたから」

「君は何でも知ってるね」

「何も知らないさ。けど、先輩ならやれる。きつとうまくいくさ。いつの日か自分自身も幸せに出来るよ」

「そうよ」と彼女は言った。「きみはいつか言ったよね。何かを求め続けなければ生きていく意味なんてないって」

「うん」

「ずっと欲しかったの。この部屋みたいに穏やかに時間の流れる場所が。きみと私がかここに居て、ゆっくり本を読みながら談笑して……。きみと出会うて気づいたの。ああ……、私こんな場所を求めていたんだって。この部屋はなくなってしまう。それに私は来年卒業してしまう。いつまでも変わらない、夢みたいな空間は何処にもない。楽園は、自分の手でつくるしかないのよ」

彼女の瞳には強い力が込もっていて、僕には他に言うべき言葉は見つけられなかった。

「側に居るさ。手助けなんて出来ないけれど、ずっと隣で支えるよ。先輩が旅立つその日まで」

「優しいね」彼女は笑ってそう言った。

12

それからの日々は日まぐるしく過ぎて行つた。雨の日は二人で喫茶店を巡り、遠い異国に思いを馳せた。

彼女の行き先はイタリアに決まった。イタリアのバールで様々なパリエーションのコーヒーを学ぶ旅。彼女は苦勞してホーム・ステイ先を探し、イタリア語のイントネーションの練習に励んだ。夢を語る彼女の横で、僕はほとんど遠のいて行く二人の距離を眺めていた。

予定通り三月に彼女は高校を卒業し、単身イタリアに渡つた。彼女が最後に言った言葉を僕は今でも覚えてる。

「帰つて来たたらお祝いしましょう。きつとその頃、私達は楽園のこちら側に居るはずよ」

僕は毎週手紙を書いた。それは来るべき再会の為に必要なことだつたし、二人の距離を近づける、唯一確かな方法だと考えていた。にも関わらず一ヶ月に及ぶ文通は二人の距離を近づけることが出来ず、気づいた時——それはただの一方通行のメッセージであり、返事は来なくなっていた。

僕は時々思い出す、どしゃぶりの雨とココア味のシガレット・チョコレート。思い出の中の彼女はいつでも孤独で、それでも僕を勇気づけてくれた。幾つもの物語と何杯ものコーヒー。振り返つた二人の時間は紛れもなく楽園のこちら側だった。

彼女が卒業した一年後、僕も同じく卒業した。

彼女が店を開いたとの報せは、未だ耳に入っていない。

memoirs.07 『cigarettechocolate』

短編集vol.01 『幾つかの小綺麗なレストラン』より

<http://p.booklog.jp/book/44078>

著者：延藤 詩喜

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/shiki2501/profile>

Blog：<http://coffee-and-cigarettechocolate.blogspot.com/>

Twitter：<https://twitter.com/#!/shiki2501>

Facebook：<http://ja-jp.facebook.com/people/Shiki-Endo/100002495981910>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44078>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44078>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.